

『シンクロニシティ・キー』

平和統一 NEWS 61号 (2013/10月号)

渡辺 久義

私は今、この8月20日に発売されたばかりの、デイヴィド・ウィルコックの500頁の大著『シンクロニシティ・キー』を翻訳している。シンクロニシティというのは「集団的無意識」の研究で有名なC・G・ユングの造語で、共時現象あるいは同時現象と訳すべきもので、「意味のある偶然の一致」というのが最も簡単な説明であろう。もう少し詳しく言えば「無関係に見える出来事の神秘的な時間的一致」である。ほとんど誰にでも必ず何度かは経験があると思われるが、関心のない人は気にも留めないでやり過ごしている。超常現象について何冊も本を書いているコリン・ウィルソンは、ある問題について知りたいが、誰に訊ねようも何を調べようもなく困っていると(ネット検索のなかったころの話)、自分の本棚からポロリと本が落ちて、開かれたページにそれが書かれていた、という体験を語っている。これなどは笑い出したくなるような話だが、これほどではないが、これに似た体験は私にもある。デイヴィド・ウィルコックには、この共時現象が頻繁に起こっているらしく、彼の語る沢山の体験の中には、コリン・ウィルソンとそっくりの例もある。

これをあくまで偶然で片づける人は別としても、そんなことに何の意味があるのかと、格別、問題にしない人があるかもしれない。ウィルコックは、こうした体験は——特にそれが頻繁に起こる場合には——これまでの自分の世界観をすっかり変えてしまうきっかけになるものだと言っている。この宇宙は偶然に存在しているのではなく、意味や目的をもって存在している、そしてそこに生きている自分も偶然生きているのではなく、この宇宙の重要な一部として意味や目的を与えられて動かされている——私は私であるが同時に私ではない、という決定的な意識の切り替えを、この体験はもたらすものだと言っている。

この本は全体として、宇宙観を切り替えさせるための科学的実証に重点がおかれているが、一章だけ自伝のように個人的体験を語る部分があり、その一部を引用しようと思う。私がなぜこの部分を選んだかは、一読されればわかると思う。ウィルコックが大学2年のとき、かつての高校の友人たちに、自分はこれまでの生活を改め、霊的な目的をもって他者のために生きる決意をしたと語ると、友人たちは彼を徹底的に冷笑し、罵倒し、侮辱する。彼はいきなり立ち上がって外へ出た——

10分ほど歩いてから、私は私の友人の住む通りと、私の通りの交差点に立った。私は完全に打ちひしがれ、涙を押し戻そうと戦っていた。私は両腕を空に向かって差し上げ、話しかけたい衝動に駆られた。

あなた——あなたが誰であろうと何であろうと、私はあなたがそこにおられることを知っています。私はある理由があってここにいることを知っています。私の人生には目的があります。あなたは私にそれを示してくださいました。私はあなたの存在を信じ、あなたを信頼します。私は自分が狂っていないことがわかっています。私は自分の道を選びました。私は苦しんでいる他の人々を助けることに、一生を捧げようと思います。私はあなたが私を助けて下さったことに感謝します。——そして今、私はあなたを助けたいのです。(強調は訳者)

私はこれらの言葉が私の心を通り抜けるあいだ、夜空の小さな星々の集まりを見つめていた。私が「私はあなたを助けたいのです」と言ったその瞬間、巨大な黄白色の流れ星が、私が見つめていた領域を直接、横切っていった。それは本物だった。それは否定できなかつた。驚くべきことであつた。それは私が子供のころ、ときたま閃くペルセウス座や獅子座の流星群を見ながら、眠らないで庭の長椅子に幾晩も坐っていたときにもなかつた、私の見た最も大きな、最も明るい流れ星であつた。脱自的なエネルギーの驚くべき大波が、唸るように私の身体から湧きあがり、私はある壮麗な靈的存在を感じた。歓喜の涙が私の顔を流れ落ちた。私は宇宙に向かって話しかけた——が答えは返ってこなかつた。それはその時から今に至るまで、私人生の最も深い出来事の一つであり続けている。

「我々は神に救われるのではない、我々が神を救うのだ」という文鮮明師の言葉を、師の最も感動的な言葉の一つとして、私は『自叙伝』の短い書評に引いた。(これは韓国語にも翻訳された。)この本『シンクロシティ・キー』でもここは最も心に響く個所の一つであろう。著者ウィルコックはいわゆる宗教的な人でなく、この本にも宗教色はほとんどない。だからこそ、この一致はなおさら注目に値する。ここに書かれている体験は、旧来の感覚では「奇跡」であろうが、ここではそうでなく「シンクロシティ」であり、宇宙のすべては一つの心を共有しているという、この本の提唱する宇宙モデルからすれば、そこに格別、不思議はない。「天が感ずる」ということは自然の現象なのである。